Kinjo Gakuin University

ヴィクトリア朝大論争(3):「総督エア論争」

——カーライルとディケンズをめぐって——

楚　輪　松　人

I. ジャマイカ事件

"Rule Britannia! *Britannia rules the waves!* Britons never shall be slaves." というJ・トムソン(1700-48)の国民歌 *Rule Britannia* の一節を合言葉として，1830年から1880年に至る半世紀の間，英国は「七つの海」にまたがる帝国版図を拡大し，文字通り世界を完全にその支配下においた。1865年10月7日，大英帝国と呼ばれたその世界最大の植民帝国の一隅，西インド諸島のジャマイカ島のモラント・ベイで黒人農民の叛乱が勃発する。これを時の英国人総督ジョン・エドワード・エア(1815-1901)は，19世紀の水準でも驚くべき過酷さで鎮圧・処罰した。英国の海外植民地政策史上，最大の汚点とも言える「ジャマイカ事件」である。

1806年以来，英国は世界に先駆けて議会で奴隷売買の是非を討論し，1807年にそれを禁止し，1833年に奴隷解放令を公布した。ジャマイカでも1838年8月1日に奴隷解放が実現していたにもかかわらず，時の総督エアは一般には行き過ぎと思われるほどの武力を行使したのである。騒乱は二週間を経ずに終息したにもかかわらず，戒厳令は30日間にわたって発令された。その間に総督側は黒人民衆に対して虐殺と拷問をほしいままにし，文字通り血みどろの鎮圧となったのである。その結果，殺害された黒人が

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

439名，笞刑に処せられたものが600名，焼かれた家屋は1000軒にも及んだ。果たして，総督エアは英雄か，それとも残酷な殺人鬼か。この事件の是非をめぐって，英国国内の言論界，当時の知識人の意見を二分するような大論争（コーズ・セレーブル）が勃発したのである。世に言う「総督エア論争」である。

総督エアを擁護する「エア援護基金」のメンバーを構成したのが，英文学史上に燦然と輝く地位を占める文学者たち——カーライル(1795-1881)，ラスキン（1819-1900)，テニスン（1809-92)，ディケンズ（1812-70)，キングズリー（1815-75)，フルード（1818-94）たちであり，彼らにとって，事件は植民地の危機的状況と英雄的行為の物語と映り，総督エアの勇気，決断力，指導力を称揚する。他方，「エア援護基金」の反対陣営である「ジャマイカ委員会」は，ジャマイカ議会の議員であったジョージ・ウィリアム・ゴードンを叛乱の首謀者と見なし，彼をわざわざ戒厳令の厳守されている地域にまで連行し，軍法会議で大逆罪と共謀罪の咎で絞首刑にした総督エアの死刑濫用，流血惨事となったその残虐非道な鎮圧方法を裁判にかけて罰するべきであると主張した。彼らにとって，事件は法と個人の自由に係わる問題であった。そのジャマイカ委員会の主たるメンバーが，英国民主主義思想史にその名を連ねる人物たち，J・S・ミル（1806-73)，H・スペンサー(1802-1903)，T・H・グリーン(1836-82)，ダーウィン(1809-82)，A・V・ダーシー（1835-1922)，T・ハックスレー（1825-95）などの著名な政治学者，経済学者，法学者，自然学者たちであった。また新聞や雑誌といったメディアも論争に総動員され，一流紙では『タイムズ』と『パンチ』がエア弁護の側につき，『エコノミスト』と『スペクテイター』は反エアの論陣を張って報道合戦を展開したのである。

「総督エア論争」に関しては既に多くのことが書かれている。『ジャマイカの流血とヴィクトリア朝の良心』(1962)[1] で，米国人歴史家バーナード・センメルは，この事件が他国に先駆けて奴隷を開放し，しかるべき権利を認めていたはずの英国の国内における人種差別と階級的偏見をあぶりだす

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

試金石となったことを指摘する。このセンメルの研究に多くを居拠する後続の研究として，1956年，ジャマイカがトリニダード・トバゴとして，長い英植民地支配から脱却して独立を達成した時の初代首相，黒人歴史家E・ウィリアムズによる『イギリスの歴史家と西インド諸島』(1964)[2)]がある。ウィリアムズは西インド諸島出身者の視点から，「西インド人たちを軽視し，劣等な状態に終始閉じ込め，彼らがそうした状態にあるのは彼らの責任であるとすることを狙いに書かれたイギリスの歴史家の歴史叙述」から，彼の同胞を精神的に開放するため，そして国民意識の覚醒を促し，同国民の主体性を確立する狙いで，この啓蒙的で画期的な歴史研究を上梓したのである。日本では，政治思想史研究家の田中浩氏が「この事件のもつ重要性は，ジャマイカ反乱がたんに西インド諸島にかかわる問題であっただけでなく，まさにこの反乱をめぐる対応が，実は，イギリス本国の政治・労働問題，アイルランド問題，さらには広く資本主義体制にとっての根本問題ともいうべき植民地問題，帝国主義問題，アメリカ問題，アフリカ問題等々の解決方法と密接に結びついていた」[3)]と実に正鵠を射た指摘をする。また近年，英文学者の富山太佳夫氏は，『英語青年』の連載の中で，この騒乱が，文学・新聞・雑誌に転位された「事実をめぐる言説の戦い」であること，そしてヴィクトリア朝が孕んでいた内的な矛盾を単純化し拡大して投射する「ジャマイカからの贈り物」[4)]だと注目する。

世界史史上，最重要事件のひとつであるにもかかわらず，日本の高等学校のいずれの『世界史』の教科書にも言及されないこの事件を，「性，階級，人種による抑圧」をテーマとするフェミニズムの視座から考察すれば，「エア援護基金」のメンバーには，ある共通した思想性が見えてこないだろうか。「人種」や，明らかに否定しえない「生まれながらの」身体的特性を強調し，文化的差異というイデオロギーを認めない彼らは，男性優越主義者(メイル・ショーヴィニスト)たちと言えないだろうか。無論，19世紀の人種優劣主義(レイシャリズム)的な作家は，人種差別を普及させるという点で，当時の民衆と完全に歩調を

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

とっていたことは否めない。また彼らを人種主義者（レイシスト）と判断しても，その文学史上の業績が減ずるものでもあるまい。以下，本稿ではヴィクトリア朝に蔓延した植民地主義の思想，特に評論界において時代精神を指導したカーライルと，小説界において雄飛活躍したディケンズの悲劇的な言説に焦点を当て，その差別性を検証することにしたい。

Ⅱ．植民地主義者の倫理

世界の盟主たらんともくろむ大英帝国主義の領土拡張政策，その倫理的根拠は，キップリングの詩題（1899）から人口に膾炙するようになった「白人の責務（ホワイト・メンズ・バードン）」であった。ヴィクトリア朝の代表的な総合雑誌『十九世紀』に掲載された白人帝国主義文化の推進者Ｈ・Ｅ・ワイアットの評論「帝国の倫理」[5] によれば，大英帝国の責務・大義とは次のようなものである。

我々には――他の者たちではなく，我々にこそ，ある明確な義務が与えられたのだ。それは光明と文明を世界の暗黒の地域に運んでゆき，アジアやアフリカの精神をヨーロッパの倫理思想に触れさせ，平和も安泰も知らない無数の者たちに，人間が進歩するためにこうした第一条件を教えることである。このような建設的な努力こそ我々の果たすべき仕事の一部なのである。

この植民地支配を正当化する論理，すなわち植民地の文明化という強い使命感や「後進国」指導の白人の重荷は，この時代の風潮（エートス）となっていたＳ・スマイルズ（1812-1904）の説く「自助の精神」とは自家撞着しないのであろうか。「天は自ら助くる者を助く」という格言で始まる『自助論』(1858) の要旨は，「外からの援助は人間を弱くする」ため，「最も良いことは何も

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

しないで放っておくこと」ということであったはずである。無論，海外植民地行政や帝国主義問題は，国内の社会・労働問題と密接に関連していたのであり，事実，当時英国は社会保障政策の実現のための財源調達源として海外の植民地を拡張していた。またE・J・ホブズボームが指摘するように，対外強硬論の背景には政治的思惑があった。

大いなる帝国主義者セシル・ローズが，1895年に，内戦を避けようとすれば帝国主義者になるしかないと述べて以来，たいていの論者はいわゆる「社会帝国主義」，つまり経済政策や社会改革などで生じた国内の不満をへらすために帝国の拡大を利用する試みのことを意識していた。[6)]

さらに植民地介入主義は，他者に自分自身を強要したいという欲求に他ならないであろうし，「白人の責務」など，その実現による略奪の意図の詐称であることは，植民地恒久化体制の真の理由として，元植民地省官吏でオックスフォード大学の教授H・メリヴェール（1806-74）の「植民地を支配する楽しみだけが植民地保持の理由であった」[7)] という告白からも明白である。

当時の英国人の地理感覚を考えると，その世界地図の上には，グリニッジ子午線を有するブリテン諸島が中心に，その左に大西洋とアメリカ，その右にヨーロッパとアジアが位置する。自分を「中心」に置き，他者を「周縁」に置き，その位置関係を保とうと腐心する視覚，視覚による位置づけ現象，まさしく「視線の政治学」を実践していたのである。そしてロンドン，すなわち世界の中心であるロンドンを中心として，ぐるりと「世界」と言う名のコンパスをめぐらせると，その円の左の周縁上に反転された東インドとして西インド諸島がある。1857年に「インド暴動」の起きた東インドに反措定される西インドで，再び勃発した原住民の暴動，「ジャマイカ事件」に対して，帝国主義を擁護し，原住民に対しては力を訴えること

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

を主唱する時，原住民の植民者に対する残虐行為を思い出したのは詩人のテニスン一人だけではあるまい。この桂冠詩人は「エア援護基金」への参加を受託する手紙（1866年10月）の結びで次のように付言する。「インド暴動の勃発は，狂人を除けばすべての人間に対して，力と迅速な決断が欠けた場合にはどうなるか，という警告として残っています。」[8] テニスンの手紙は，文明化の使命と同時に，暴力的な力をもって服従させるという植民地化の二重の義務が，植民地支配者にとっても，E・サイードが『オリエンタリズム』（1978）において証言した精神的外傷（トラウマ）体験であったことを示すだけでなく，いま再び，海外植民地の黒人蜂起という形で，抑圧されてきた周縁のパワーの爆発，その中心に向かっての逆流を示す事件として，ヴィクトリア朝の人々の不安と恐怖を掻き立てたことをも如実に示しているのである。

にもかかわらず，当時の英国の人々が重んじた「自助」の美徳，ヴィクトリア朝的価値観を，以前として被植民者にも求めなかったのはなぜであろうか。その答は「黒人には自己管理能力がない」ということの一言に尽きる。つまり政治レベルにおいては，黒人には自治能力がない，という考えである。

ナチズムに理論的根拠を与えたゴビノー（1816-82）の著作，黒人を徹底的に誹謗し，過度に単純化された分類と，目もくらむような自民族中心主義（エスノセントリズム）の価値判断の書『人種不平等論』が刊行されたのが1854年であった。そしてヴィクトリア朝時代には次のような人種主義（レイシズム）の言説を受け入れる土壌が整っていたのである。

ニグロ人種は最低だ。つまり，各人種のランク付けをすれば，最下位に来るのが彼らニグロ人種なのだ。彼らが獣性の持ち主であることは，その骨盤形にあらわれている。したがって，この獣性はすべてのニグロに生まれながらにして刻印され，その将来の運命を暗示している。その知性たる

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

や，活動の領域が極限されている。[9)]

人種主義（レイシズム）とは，「白人が有色人種に対する支配，富者の貧者に対する支配を合理化するのに便利であるということの他に，それは基本的に平等主義的イデオロギーに基礎をおいた基本的に不平等主義的な社会が，その不平等を合理化する手段であり，また，その制度に内在する民主主義が不可避的に挑戦する特権階級を正当化し擁護する手段」[10)] とある。人種主義者の言説において，人種的な他者はステレオタイプによって構成され，過度に単純化された二分法（デイコトミー）により表象（リプレゼント）＝再現される。すなわち原住民は「崇高（ノーブル・）な野蛮人（サヴェジ）」か汚らわしい動物のいずれかであり，これらの中間であることは滅多にない。この二分法は資本主義家父長制文化――家父長制と資本主義のそれぞれを一枚岩的な全体的抑圧システムと容易にみなすことはできないが――において，女性が「他者」であることから生じる現象，すなわち「文学における女性像」の両極分離――聖女／娼婦，天使／魔女というマニ教的な二項対立のアレゴリー――「人間」以上か「人間」以下でありえても，決して「人間」ではないというレトリックと同一ではないだろうか。つまり人種主義における有色人種の差別と排除の言説の対象は，なにも被植民者の黒人に限定される必要はなく，その白人対黒人という対立は，性差別における男女の対立の図式を先鋭化するわけである。人類の歴史は男たちの長い植民地化の歴史に他ならない。事実，女性はジャマイカの黒人たちと同様，男性による植民地主義による抑圧の歴史を共有している点では同じ犠牲者である。彼女が社会の創始者，推進者，原動力でもなければ――家父長制の代表者かつ後継者である男性が社会であった状況では――個人でもなく，単なる男性の相対物の延長でしかない支配された他者，男性と社会の両方からの排除され，男は男であってそれがすべてという状況で，海外植民地での支配-従属の関係は，国内での男女の支配-従属関係が拡大・転位されたものと考えられるのである。

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

男性が植民地化を行いつつある社会において，女性の問題はやはり周縁的(マージナル)な問題として取り扱われる。ただし，文字通りの地理上の周縁，海の彼方の遠く離れた黒人問題とは異なり，女性の問題の場合，単に排除だけでなく，同化が起こるため一層問題はこじれてくる。自己を定位づけようとする男性の心性(サイキ)は，男，労働，正気といった久しく権力を掌握してきた「中心」の知の枠組(パラダイム)に対して，女と子供，遊び，狂気などを，つまらない，取るに足らない，まさしくペリフェラルなものとして一方的にその周縁に反措定し，押し込み，もっぱら負の意味を与えようとした。そして社会の周縁に追いやられたそれらの力を馴到するための文化装置(メカニズム)として，18世紀から19世紀いっぱいにかけて骨相学(フレノロジー)，優生学(ユージェニクス)，進化論(ダーウイニズム)などの一見，客観的真理を装う擬似科学(シヤム・サイエンス)などの抑圧のイデオロギーを流行させ，さらにあらゆる知の体系(ネットワーク)や新聞や雑誌といったメディアまでを総動員して差別の言説を強化して行ったのである。まして表象や言説それ自体が，権力行為であり分割と排除の行為であると考えれば，まさしくS・ギルマンの『差異と病理』[11]の副題が「性，人種，狂気のステレオタイプ研究」(1985)とあるように，女性を子供，「ニグロ」，「ホッテントット」といった野蛮人と同一視する度しがたいステレオタイプ系列の言説，言説＝知＝権力＝白人男性という支配の体系が構築されていたのである。

イデオロギー的にヒューマニズムという仮面を被ったメイル・ショービニストたちの差別の言説を創始，推進したのが，時代を代表する多くの男性作家たちであった。次に，ジャマイカ援護基金のメンバーたちの強烈な差別の言説をカーライルの場合を例に取り考察していくことにする。

Ⅲ．カーライルと黒人問題

ジャマイカ事件に対して，植民地の秩序を保ち，これ以上の争いを防ぎ，英国の経済を守るためには武力行為も必要である，という植民地主義的見

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

解を代表するのは，高邁な愛国主義と人種の誇り，反民主主義，反平等，選良(エリート)原理，19世紀中葉の英国における黒人蔑視，人種差別の主唱者カーライルである。その最大級に反動的な差別思想が，『フレイザーズ・マガジン』に1849年12月に匿名で寄稿された，最も醜悪な人種差別の言説「黒ん坊(ニガー)問題」（'The Nigger Question'）[12] である。

カーライルはこの論説の中で，原住民の比喩形象(エンブレム)として計40回「カボチャ」という言葉を繰り返し，「黒人＝怠惰なカボチャ食らい」という観念連合を構築して黒人の位置を定位しようとする。無論，定位することは支配し，専有することの謂に他ならない。カーライルによれば，解放奴隷は，めいめい「ラム酒のビンを片手にもち，半ズボンもはかず，カボチャをたらふく食い，世界でもっとも実り豊かなこの土地をジャングルに逆戻りさせつつある」[13] のである。彼は戯画化した「カボチャを口一杯にほおばって真昼間からぶらぶらしている黒人」に向かって言う。

お前はもはや「奴隷」ではない。また私も，できれば再び奴隷の身に舞い戻ったお前の姿を見たくはない。しかしお前は，今後は，お前よりも生来賢明な人々の，生まれながらにしてお前の主人たる人々の，下僕にならなければならないことははっきりしている。白人がお前よりも賢明に生まれついているとすれば（このことを疑う人はだれもいない），お前は白人の下僕にならなければならない。[14]

この「黒人＝カボチャ食らい＝劣等人種」という，おぞましい人種主義の連鎖を形成するカーライルによる黒人の植民地主義的物語(フィクション)化，その人種優劣主義(レイシャリズム)的，アパルトヘイト的な一連の観念連合の行き着く所は，平等と人権に基礎を置く議会に代わって，一人の指導者が統治する組織化された社会，「英雄」の統治する社会である。無論，その社会の最底辺には黒人がいる。そして黒人の唯一の立場は屈従でしかないというのである。

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

もっとも，英国が他国に先駆けて西インド諸島で奴隷開放策を実施したのは，基本的には経済的利害による政治的便宜主義によるものであった。すなわち主要な砂糖供給地であったジャマイカの奴隷制生産による砂糖プランテーションが，19世紀に入ると，もはや自由貿易英国の資本主義にとって利用価値がなくなったため見棄てられたという経済的理由によるのであって，奴隷解放は，英国伝統の人道主義に基づくものではない。このような歴史的経緯を一切無視して，西インド諸島の黒人を「カボチャ食らい」と非難するのは，カーライルの偏見以外のなにものでもない。事実，ジャマイカ事件のそもそもの直接的原因は，奴隷解放後に，土地を持たない人々の土地要求に対して，黒人小農を人為的に創出することを制限する女王の回答[15]であったことなど，カーライルの眼中にはないのである。「あちらでは黒人たちはカボチャをたらふく食らい，優雅に暮らしているというのに，こちらでは白人はジャガイモを口にすることもできず陰鬱な気分で暮らしている」[16]とカーライルが嘆くとき，それはスペンサーの社会進化論やベンサムの「最大多数の最大幸福の原理」と同様，当時の英国社会が抱えるさまざまな難題，特に，彼がチャーチズム病とよんだ問題を如何に解決すべきか，という問題意識から打ち出された処方箋（カルテ）の一つであったことは間違いない。ただ総督エア反対派の先頭に立っていたのが労働者階級であった。その労働者階級の台頭とチャーチスト運動の高揚に強い恐怖心を抱き，代議制民主主義議会に代わって，一人の指導者「英雄」と選良が統治する組織化された封建的・非民主主義的な社会，独裁政を信奉するカーライルの思想の中で，その労働者蔑視観と黒人蔑視観がぴったりと重ね合わさったに相違ない。

しかし白人種の人種的優越性の確固たる信念を公言して憚らない黒人を貶める乱暴な言説は，二重の意味で帝国主義的な言説となっている。第一に，それは黒人劣等論を表面化させ，植民地への政治的介入が肝要であるとする狂言的愛国主義者の言説であるだけでなく，第二に，第二次選挙法

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

改正（1867）運動に力を入れていた労働者，過激派フェニアンの行動をめぐる国内的騒乱など，当時の英国の状況を憂い，警世家として垂訓を試みようと企てた結果，英国国内の問題を植民地の問題に隠喩的に転位させ，集約し，利用しようとしている意味で，別の形態の帝国主義，すなわち「修辞（レトリック）の帝国主義」とも呼べる言説となっているのである。彼のこの心性こそが植民地主義者の心性なのである。

「黒ん坊問題」から18年後に発表された論説――世紀の頽廃とその結果生まれた政治の堕落など，国内の病弊を診断した民主主義者，自由貿易主義者，経済学者たちの提起した処方箋（カルテ）は「ナイアガラ瀑布を下る」ことにも等しいとする論説――「無謀な企て，さてその後は」（'Shooting Niagara: And After ?'『マクミランズ・マガジン』1867年８月）の中でも，カーライルは黒人蔑視の言説を繰り返す。総督エアを西インド諸島における救世主とした彼の認識は，遙か遠く離れた植民地での原住民の蜂起よりも，国内での労働問題，社会問題，特に参政権運動を求める労働者階級の煽動的運動の恐怖を物語り，黒人問題など彼にはどうでもよかったと言う。「全能の神は，黒人を下僕となるべく定めた給うた。私個人にとっては，黒人問題はこの世で最も緊急度の低い問題，最も取るに足りない問題であったのである！」[18] と総括し，「ジャマイカ問題は腹立たしくなる問題の一つであり，それについては語るも恥ずかしい思いがする。」[18] と結論しようとするのである。

植民地の拡大が衰え，植民地市場への依存が増大したとき，総督エアについての拡大討論は，植民地についての読者のイメージを固定化するのに役立った。原住民がほとんどグロテスクなまでに誇張され，黒人は愚かな人種であるという人種優劣説（レイシャリズム）を擁護し推進するカーライルの言説は，確かに奴隷解放以後の黒人に対する恐怖と帝国崩壊を予感する読者に満足感をもたらしたかもしれない。しかしエア論争におけるカーライルの黒人虐待の言説を契機として，若い知識人，カーライルの選良原理に共鳴し，彼の

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

信奉者であった若き自然哲学者や科学的政治評論家たち――T・ハックスレー(1825-1895)，J・ティンダル(1820-1893)，J・モーリー(1838-1923)，F・ゴールトン（1822-1911），H・スペンサー（1820-1903）たちが，この論争を契機に決定的に彼を離れていった[19]ことが示しているように,「語るも恥ずかしい思いをさせる」のはジャマイカの黒人ではなくカーライル自身である。彼自身が植民地主義者自身への所謂「ブーメラン効果」と呼ばれるもの,「植民地主義者は彼の良心を宥めるために，他の人間を動物として見なす習慣を身につけ，彼を動物のように扱うことに慣れさせ，そして客観的に彼自身を動物に変身させる傾向にある」[20]ことの生きた例証となっているのである。それは『ジェイン・エア』(1847）のロチェスター氏が白人女性ジェインと結婚するためにクリオールの妻バーサを退ける態度，『闇の奥』（1902）のクルツの姿，また『インドへの道』（1924）で，僅かなインド滞在の間に生来の人道主義を喪失して不快な人物へと変貌して母親ムーア夫人を嘆かせるヒースロップの姿などと同様に，カーライル自身が醜悪でグロテスクな人物に変貌してしまっているのである。

カーライルの論説の真意が，都市労働条件や生活条件，特に住宅問題が一段と悪化する状況で，英国の病弊を診断し，スペンサー，ベンサムたちの提起した処方箋(カルテ)を攻撃することにあったとしても――確かに，黒人問題や奴隷解放問題は，資本主義国家における事実上の奴隷，労働者階級の問題と本質的にその根を同じくするものであり，従って人種問題の真の解決は，労働問題や植民地問題の解決と軌を一にするものであることまでは，この「チェルシーの賢人」は見抜いていた――残念ながら，J・S・ミルの場合とは異なり女性問題に関する視座は彼には欠落していた。しかしそれをこの「ネオ・ファシスト」[21]に求めること自体が，所詮，無理な話なのかもしれない。

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

Ⅳ．ディケンズと黒人問題[22)]

ヴィクトリア朝の小説界を代表するディケンズの植民地理解は，すでにクリミア戦争を契機として高速増殖されていた。彼の「インド暴動」に対する見解は，カンプールでのインド人による英国人への暴虐行為に対する時のインド総督カニング卿（1812-62）の恩情処置――インド人に対する盲信的信頼と管理体制の不備――を指弾する多くの手紙に明白である。[23)] 大英帝国の植民地に対してブルジョアの共有する大いなる不安と恐怖，良き指導者の不在に対する不満，血による報復を求める世論，それらを投影してディケンズが物語（フィクション）化したのが，インド暴動の最中に発表されたクリスマス物語「ある英国人捕虜の危難」(1857)[24)] である。そこで描かれる裏切り者の原住民クリスチャン・ジョージ・キングは，限りなく道徳的に退化した人間であり，この被植民者に対するグロテスクなまでに歪んだ言説は，暴動の最中，英国中を席巻したインドの原住民に対する病理学的な憎悪の表現と言ってもよい。

無論，ディケンズは「カーライルに会うためなら，いつでも，どんな遠くへでも参ります。この気持ちは世の誰にも劣りません」[25)] と告白するほどに心服していたカーライルの白人至上主義の議論を全面的に支援していたわけではない。しかし，「カーライルに対する心服は年とともに深まり，晩年のディケンズはこのエリート主義者を誰よりも重んじ，無上の敬意を表するようになっていた」[26)] のであり，特に晩年は彼の黒人観はカーライルのそれと著しい類似性を帯びていく。

かってのディケンズはアメリカ黒人の前進に深く関心を持ち，南部の奴隷所有者に辛辣に批判的であった。例えば，英国が奴隷制度を廃止したことを感謝して，1842年３月21日に友人フォスターに宛てた手紙の中では，その感情を注ぎ出す。「我々が呪われた唾棄すべき制度に背を向けたこと

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

を思うと，まるで重荷が取り除かれたかのように私の心は軽くなります。」[27] しかし結局は，人種に対する楽観的な期待に幻滅を感じたのか，あるいはその同情は英国の貧困階級に取っておいたというべきか，彼の黒人に対する態度は一変する。作品の中では時代の激しい告発者，批判者であっても，意識においては現状追従の保守派であったディケンズらしい。第二回目のアメリカ訪問（1867－78）では再びフォスター宛の手紙の中でボルチモアでの見聞を次のように報告する。[28]

奴隷制の残骸がいまだに街から排除されていないのを見るのは驚くべきことです。よろよろとだらしなく歩き，誤魔化して仕事を延ばす，そして言うことを聞かない連中が，自由に働ける仕事の周りをぐるぐる回るばかりで実際にそれに取りかかろうとしないのが目立ちます。こういう連中に投票権を与えるのは，少なくとも今のところは悲しむべき愚行なのだということが，彼らの目玉の回転に，彼らの口の薄ら笑いに，また彼らの頭の出っ張りに，はっきりと示されているのが感じられます。

無論，この印象はヴィクトリア朝に強固に根を張っていた「骨相学」という擬似科学に基づく人種差別の言説の投影でしかない。また同地の刑務所では，彼はその人種優劣説に関する知識も披瀝してくれるのである。[29]

大勢の黒人が集まると，非常に快適とは言えない臭気が漂うことは否定しがたい事実です。ですから小生も彼らの宿舎からは，そこそこに退散せざるを得ませんでした。黒人はこの国から急速に死滅するだろうと小生は確信しています。彼らを見ていますと，彼らよりもっと活動的で，策略に富み，努力する，いっそう強力な人種を相手にして，彼らが地歩を守り得ると考えることは明らかに馬鹿げていると思われます。

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

「科学」の名において一時的流行した社会進化論（ソーシャル・ダーウイニズム）の信奉者たちや激しい人種優劣論者の言説を想起させる手紙である。彼にとって大事なことは英国国内での緊急な社会改革であり，海の彼方の解放奴隷の運命など，国内の抑圧された労働者以上に，英国が問題とすべきではないのである。ジャマイカ事件に対するディケンズの意見は，総督エアが黒人蜂起を過酷に鎮圧したことに対して非難を受けていることについて述べた，親交のあったスイス人の友人セルジャ宛の手紙[30]から明白である。

ジャマイカ騒乱はもうひとつの希望の持てる事件です。遠く離れた黒人——あるいは原住民，あるいは悪魔——に対する壇上からわめきたてる同情と，我々の同国人に対する壇上からのまったくの無関心とが，流血と蛮行の最中にあって，途方もなく矛盾していることにまったく激怒しています。つい先日，マンチェスターで愚かなおしゃべりたちの会議がありました。ジャマイカ総督の騒乱の鎮圧方法を非難するというのです。このように我々はニュージランド人やホッテントットたちにしつこく悩ませられているのです。

この手紙は彼自身がその一部を生産していたヴィクトリア朝の巨大な言説の貯蔵庫から紡ぎ出されてきた織物，あるいは彼が心服するカーライルの織機で織り上げたかのようなテクストであることは否めない。彼にとって大都会ロンドンでの貧民の惨状，社会環境の劣悪化，スラム街での大気汚染，住宅不足，衛生不良，無知と貧困が蔓延する国内問題が最優先課題であり，それらに背を向ける海外の宣教師や博愛主義者の安息所であるエスセター・ホールの批判は『荒涼館』(1852-53) の「望遠鏡的博愛（テレスコピック・フイランスロピー）」主義者のジェリビー夫人に典型的なように，生涯を通じてなされている。不幸にして自分の多くの子供を育てる以外に，ひとつの使命を持つジェリビー夫人は，英国以外の土地のことを重視しすぎ，アフリカの哀れな原住

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

民を教化する運動,植民地化に彼女の全身を打ち込んで熱中している間に,自分の家庭のことをまったく顧みず,夫は破産,子供は野良犬同然たる窮地に陥る。そしてアフリカ植民計画に失敗するや,彼女は今度は女権拡張運動に浮身をやつす。家庭内(ドメスティック)/国内の問題をそっちのけにして家外の博愛活動に身をいれるこのジェリビー夫人に,恐らくディケンズは海外植民政策の頽廃の例証を見たのである。

確かに,家庭,ディケンズが信崇(カルト)化した家庭は,ブルジョア世界の神髄であった。そしてそこでだけ,資本主義ブルジョア社会の問題と矛盾を忘れられること,あるいは作為的に排除することができたのである。彼の小説の読者にとっても家庭で,そして家庭でだけ,調和的で上流階級の幸福という幻想を持つことができた。屋内での暖炉の火とパンチ酒とは対照的に,屋外の荒れ狂う雨と雪を背景にしたディケンズが祝福した家庭のクリスマス,屋内の家庭の暖かさと外の世界の寒さ,そして両者のコントラストを同時に象徴するクリスマスを謳歌したディケンズがこの問題についてポッドスナッパリー——英国以外の土地のことをあまりにも軽視しすぎる偏狭な愛国心の持ち主,何か面倒な問題に出会うと,右腕を一振りして「そんなことなど知りたくない。話したくない。そんなものは認めない」と,どんな問題も積極的に無視して片づける『共通の友』(1864-65)のポッドスナップ氏のような態度——を発揮したのは如何にもディケンズ的と言えないこともない。

V. まとめ

ジャマイカ事件の起こった年に,19世紀後半の最大の歴史的事件であるアメリカ南北戦争が終わり,北軍の勝利は1865年の憲法修正による黒人奴隷解放をもたらした。また二年後の1867年には,英国国内でも第二次選挙改革で都市労働者にもようやく選挙権の拡大が計られている。以後,英国

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

は独占資本主義と帝国主義時代へ本格的に突入する。すなわちE・J・ホヴズボームがその二著の標題としている『資本の時代　1848-1875』が終わり，本格的『帝国の時代　1875-1905』へと突入するのである。その英国史のなかで，ジャマイカ事件は，英国の帝国主義や植民地政策の転換点（ターニング・ポイント）を画する事件となり，その後の海外政策に修正を迫ることになる。すなわちこの事件を契機に英国は「インド暴動」(1857-59) のような武力で植民地人を弾圧する方向を修正し，「ボーア戦争」(1899-1905) を最後に，英国が海外に植民地獲得を開始して初めて，かつてのジェイムズ・ハリントン (1611-77) やアダム・スミス (1723-90) が論じたような植民地分離・自治の方向を承認して行くようになる。

総督エア論争は，植民地の拡大が衰え，植民地市場への依存が増大したとき，植民地行政に関する最も有意義な公の論争であったことは否めない。しかしこの問題にフェミニズムの視座から把握していたのは，この事件をめぐるその活動が選挙民の反発を買い国会議員の地位を失うことになったエア反対運動のリーダー格J・S・ミルだけであろう。父ジェイムズ・ミル (1773-1836) の下で東インド会社に35年間勤め，また『フレイザーズ・マガジン』の1849年12月に掲載されたカーライルの「黒ん坊問題」に対する反対言説である「黒人問題」('The Negro Question') を翌年1850年に同誌 (XXVI) に投稿し，1861年には『代議制統治論』を著し，またラスキンの『胡麻と百合』(1865) の反対言説として『女性の奴隷』(1869) を著し，議会でも婦人参政権を要求して女性の権利の擁護者として尊敬されてきたこの「不満足なソクラテス」について，当時の自然文化人類学の雑誌[31]は，皮肉にもミルの問題意識の正鵠を射た報道をしている。

ジョン・スチュアート・ミルは，ニグロ——および婦人の解放のための選挙権を当然主張せざるを得ない。このような結論はミルが立脚している根本前提からの当然の帰結であり，その根本前提についての間接証明法と

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

なるものである。

労働者階級の台頭という時代の趨勢を読み取り，自由主義の唱導者と目されたミルは――その女性論に多少の矛盾はあっても――女性の解放の時代が到来することも正確に読み取っているのである。ジャマイカ事件は，19世紀における資本主義体制の矛盾と激化――国内における労働・社会問題，海外の植民地・帝国主義問題――の顕在化に加えて，女性問題も巻き込む，ヴィクトリア朝の大きな社会的な言説の一部を構成していたのである。そして女性問題はミルが指摘しようとしたように，反奴隷制，反人種差別，反植民地主義，反帝国主義の思想と相互に密接に結びつきつつ，世界におけるデモクラシーの進展とともに次第に強まって行ったのである。

最後に一言。「得意気に自分が人種差別反対論者であると名乗ることによって，われわれはほとんど何の犠牲も払うことなく，良心の慰みを手に入れることができる」と言ったのはフランスの文学理論家T・トドロフである。我々がなすべき問題は，ひとつの時代の限界や狭隘さを我々の時代の偏見で置き換えることではなく，如何に問題を認識し，現代的な良心の陳腐さを注意深く問い返してみるかということであろう。トドロフのいう「人種差別，性差別，全体主義や核兵器は非常に真剣な問題である。われわれが外部の世界を忘れ去ってしまいがちな大学という閉ざされた空間のうちにおいてのみ，価値の問題に関する懐疑的あるいは相対的な未決定状態とたわむれることが可能なのである」[32] という，いましめを忘れてはならないのである。

注

1）Bernard Semmel, *Jamaican Blood and Victorian Conscience: The Governor Eyre Controversy* (London: MacGibbon and Kee, 1962)

2）Eric Williams, *British Historians and the West Indies* (London: Andre Deutsch Limited, 1964). （邦訳，E・ウィリアムズ／田中浩訳『帝国主義と知識人――イ

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

ギリスの歴史家たちと西インド――』岩波書店，1979).

3）田中浩，『帝国主義と知識人』の「解説」pp.391-392.

4）富山太佳夫，「ジャマイカからの贈り物――植民地と英文学――」『英語青年』1990年8月号～12月号

5）H. E. Wyatt, "The Ethics of Empire,' *Nineteenth Century* (April 1897), p. 529.

6）E・ホブズボーム，『帝国の時代1875-1914』．富山太佳夫「コナン・ドイルの世紀末6　犯罪は東方から」，『現代思想』1991年6月号，p.18からの引用。

7）E・ウィリアムズ，『帝国主義と知識人』p.30.

8）H. Tennyson, *Alfred Lord Tennyson: A Memoir* (London: Macmillan 1905), p. 450.

9）E・ウィリアムズ／川北稔訳『コロンブスからカストロまで　II――カリブ海域史，1492-1969』（岩波現代選書，1978）p.156からの引用。

10）E・J・ホブズボーム／松尾太郎・山崎清訳『資本の時代　1848-1875　2』(みすず書房，1982)，p.379.

11）Sandra L. Gilman, 'On the Nexus of Blackness and Madness,' *Difference and Pathology: Stereotypes of Sexuality, Race, and Madness* (Cornell U. P., 1985), pp. 131-149.

12）Thomas Carlyle, 'Occasional Discourse on the Nigger Question,' *English and Other Critical Essays.* (Everyman Library, 1947), pp. 303-333.

13）Ibid., p. 310.

14）Ibid., p. 329.

15）E・ウィリアムズ，『帝国主義と知識人』pp. 126-159.

16）Thomas Carlyle, 'Occasional Discourse on the Nigger Question,' p. 306.

17）Thomas Carlyle, 'Shooting Niagara: And After ?' *Scottish and Other Miscellanies* (Everyman Library, 1947), p. 304.

18）Ibid., p.312.

19）Frank M. Turner, 'Victorian Scientific Naturalism and Carlyle,' *Victorian Studies* XVIII, no. 3 (March 1975), p. 329.

20）Aimé Césaire, *Discourse on Colonialism*. Trans. Joan Pinkham. (New York: Monthly View Press, 1972), p. 20. Quoted in Erika Smilowitz, 'Childlike Women and Paternal Men: Colonialism in Jean Rhys's Ficition. *Ariel* XXVII. No. 4 (October 1986), p. 100.

21）E・ウィリアムズ，『帝国主義と知識人』p.76.

NII-Electronic Library Service

Kinjo Gakuin University

22) 以下，この章の記述にあたり，Arthur A. Adrian, 'Dickens on American Slavery: A Carlylean Slant.' *PMLA*., LXVII (1952), pp. 315-329 が有益であった。

23) William Oddie, 'Dickens and the Indian Mutiniy,' *Dickensian* 68 (1972): 3–15.

24) Charles Dickens, 'The Perils of Certain English Prisoners,' *Christmas Stories*, Oxford Illustrated Edition, 1956, pp. 161–208.

25) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 2 volumes. ed. A. J. Hoppé (London: Dent, 1966), II, p. 399.

26) Ibid., I. p.204.

27) Charles Dickens, *The Letters of Charles Dickens*, ed. Walter Dexter (Bloomsbury: Nonesuch Press, 1938), I, p. 410.

28) John Forster, II, p. 338.

29) Ibid., II. p.339.

30) Charles Dickens, *The Letters of Charles Dickens*, III, p. 445.

31) *Anthropological Review*, IV (1866), p. 115. E・J・ホブズボーム，p.357からの引用。

32) ツヴェタン・トドロフ／永井ゆかり訳「「人種」・エクリチュール・文化」，『現代思想』1988年12月号，p.88.

付　　記

本稿の執筆にあたって，E・ウィリアムズの諸著作とホミ・K・バーバ／上岡伸雄訳の「差異，差別，植民地主義の言説」（『現代思想』1992年10月号，pp.61-79）に公くを負っている。同様に重要なのは，前掲のツヴェタン・トドロフの論文（『現代思想』1988年12月号，pp.79-89）を読んだことから，本稿の方向づけをしなおしたことである。

NII-Electronic Library Service